日刊 産業新聞 Japan Metal Bulletin

経営戦略を聞く

日本精線

ROS・ROA10%目指す

生産基盤強化へ設投推進

新貝 元社長

ステンレス鋼線製造の最大手、日本精線は、国内外グループ全体におけるリニューアルを見据えた形で推進する現中計が2年目を迎え、次なるステップへの布石を打つべく、各製造拠点の大幅な見直しや戦略商品の開発を積極展開する。新貝元社長に現状および取り組みについて聞いた。

――足元の経営環境認識から。

「米中貿易摩擦や欧州や中東の地政学的リスクなど外的環境としては景気減速要因が山積している。主力のステンレス鋼線は2018年度下期からスマホなどIT関連の高機能・独自製品が顧客の需要減により調整局面となったほか、金属繊維はメモリー価格の下落に端を発した半導体メーカーなどの設備投資計画延期など、同上期まで好調だった超精密ガスフィルター（ナスクリーン）が下期から急減速した。特に半導体関連の急減速は大きな見込み違いで、在庫調整が済み、実需見合いでの動きになるのがどの段階になるかは全く不透明であり、外的要因次第といった状況だ」

「19年3月期業績は、鋼線販売数量が3456トンと前期比微減ながら、ニッケル価格上昇を背景とした販価引き上げ、ばね用材やニッケル高合金線等の需要堅調により、連結売上高は387億6000万円と前期の過去最高を更新。しかし、損益は減価償却費や人件費など固定費の増加で過去最高の前期を下回った」

――今期見通しは。

「減収減益になると厳しくみており、タイを含めた鋼線販売量は、前期比若干増を計画。数量を追うより高機能材の販売拡大に注力する」

――現在進行中の第14次中期経営計画（NSR20）の進捗について。

「『日本精線リニューアル』のスローガンのもと、高機能独自製品の上方弾力確保・拡販と持続的成長のための生産基盤強化を推進し、20年の最終年度にグループ連結経常利益55億円、連結ROS、連結ROAとも10%以上の達成を掲げ取り組んでいる。数値目標は未達ながら、行動計画は予定通りに進んでいる。やるべきことをやり、次の需要回復時には成長につなげていく」

――設備投資計画は。

「3カ年中期全体では計約100億円を計画していたが、経営環境を勘案した結果として70億―80億円に引き締める見通しだ。戦略投資は計画通り実行するが、更新や保全投資といった案件は見直しを図る。金額的イメージとしては、18年度実施が約35億円、19年度計画が20億―25億円、20年度計画が15億―20億円となる」

「東大阪工場（大阪府東大阪市）では、自動酸洗設備が年内に完工、来年から本格稼働を予定している。20年度には従来の酸洗設備の被膜酸洗ラインを自動化して、一連の同工場の投資は完了する。枚方工場（製大阪府枚方市）では、ばね用線・極細線の能力増強と製品倉庫新設や工場内物流の抜本的改善を21年3月までに実施する」

――海外拠点では。

「タイ精線（タイ）では生産能力拡大と機能強化を目的に投資を実施。18年下期には最小径16ミリまで生産できる極細線の設備導入を終え、クロム系の能力増強工事の第1段階を本年9月末に完工予定。中国で金属繊維フィルター製品を製造する耐素龍精密濾機（常熟）も伸長する需要へ対応するため、新たな真空炉の設置を終え、試運転段階にある」

――海外事業拠点の状況は。

「海外拡販の製造拠点としての位置づけるタイ精線の19年2月期業績は、売上高が45億6000万円の増収増益で、バーツ建て売上高は過去最高となった。耐素龍精密濾機（常熟）は金属繊維フィルターが好調で、18年12月期業績が元建ての売上高、利益ともに過去最高、2期連続の黒字を計上したほか、シャフト用クロム系ステンレス鋼線を生産している大同不銹鋼（大連）も、3期連続の増益で、安定黒字体質を実現している。また、欧州地域向け事業も、再度打って出る」

――新商品・技術開発の進捗について。

「昨年量産化した高強度ステンレス鋼線『ハーキュリー』の改良版で、ピアノ線B種並みにまで強度を高めた新製品『ハーキュリーEH』も試作中心に引き合いが寄せられているほか、次世代型の高機能独自製品として、シングルミクロン極細線や高機能フィルターや医療用コバルト基合金ワイヤーなどの開発を推進。また、長期的には、性能アップに向けた開発を進め有機ハイドライド脱水素方式による第3世代の水素発生モジュールや、精製分野に適用可能なパラジウム合金圧延箔を使った水素分離膜モジュールの量産化に向けた体制構築も取り組んでおり、新たな価値と可能性を創出すべく、技術革新を続ける」

（福岡 紀子）

※本記事は産業新聞社の承諾を得て掲載しており、
著作権は産業新聞社に帰属します。